

飼育チンパンジーにおける行動調査に基づく繁殖個体の選定

平賀真紀¹⁾・野口忠孝¹⁾・小倉典子¹⁾・井川亜久里¹⁾・須田朱美¹⁾・森村成樹²⁾

1) 公益財団法人横浜市緑の協会 よこはま動物園・2) 京都大学野生動物研究センター

横浜市立よこはま動物園では飼育環境を野生の状態に近付けることを基本理念とし、2009年よりチンパンジー (*Pan troglodytes*) の複雄複雌集団の飼育を開始した。社会管理を目的として、2011年8月より今日まで行動観察を継続してきた。この間、2012年に赤ん坊2個体が誕生した。その中で、交渉の相手および赤ん坊からの働きかけなど交渉の方向性に着目し、誕生前からの社会交渉の変遷を調べた。対象は、24～38歳のチンパンジー7個体（オス2、メス5）及び赤ん坊2個体（メス2）、観察期間は2011年8月1日から2015年3月31日までとした。行動は、放飼直後からの30分間を個体追跡法で観察し、1分間隔の瞬間サンプリングで採餌や休息など行動レパトリー13項目を記録した。その結果、赤ん坊の誕生後に社会交渉は増加したが、増加の割合には個体差が見られた。この結果をもとに、未経産メスの中から次期繁殖個体の選別を行った。未経産雌が繁殖する前にその育児能力を定量的に評定し、繁殖個体を選定することはこれまでされてこなかった。よこはま動物園の新しい取り組みについて紹介する。